

## ダボハゼORのすすめ

松下通信工業 唐津 一

私はある大学でORの講座をもっていたことがある。講義ではもちろんORの一般的な手法をひとつお教えのだから、試験はすべてレポートとした。テーマは自由、身のまわりのものでも新聞ダネでもよいからOR的立場から解析せよと。そして提出されたレポートにはすべて意見をつけて本人に返却してやる。採点に文句があったら、いくらでもクレームを受けつけて、あとで訂正することもやぶさかでない。

これには学生も面喰ったらしいが、こちらは大変である。はじめのうちは定員が少なかったが、クラスがふえて、100人を越すようになると、レポートの山をこなすのにはかなりの時間を必要とした。

しかしながら、これは私にとって実に楽しい仕事であった。十人十色、実にいろいろなのがでてる。自宅の近くを走る終電車を毎日乗って、終電車の乗客を克明に調べたものとか、大学のキャンパスに落ちているゴミのデータをとって、その発生源について大論文をものにしたのもあった。レイテ海戦を論ずといった作戦研究の中で、彼我のレーダーの性能の差の問題をからませたもので、なかなか読ませるのもあった。

このような話をすると、学生に対してずいぶん残酷なことを、と思う人がいるかもしれないが、これは学生の先輩からの申しおくり事項となつたとみえて、かなり時間をかけて、あらかじめ準備するのもできて、真面目な学生には評判がよかったようである。ただ2、3人組んでレポートをつくりたいというのがでてきた。うっかりOKをしたら、その翌年から、相乗りの申し出がふえてきたので、これだけはダメということにした。

ORというのは、いうまでもなく問題解決のための方法論であって、応用数学の一種ではない。だから、講義の中でも、そのことを強調しては、その場で演習問題を解かせることもやった。

ところで、ORの場で重要なことは、いうまでもなく観察力である。つまり、モノを見る目である。同じ現象でも、その見方によって、解決策が変わってくる。この場合邪魔になるのは、いわゆる月並みという固定観念である。これは〇×教育を受けた連中がはまりこむパターンであるが、私の試験では、月並みには最低に近い点数しかやらないことを、あらかじめ宣言してやった。ここでは、だからそこいらにあるORの参考書はまったく役に立たない。

これを丸写しすれば、すぐバレルから、むしろ採点は楽だった。おかしいと思ったら呼びつけて聞いてみる。すると一発で白状する。

だから授業中も、できるだけ、その時の世間の話題をとりあげて、意見を言わせる。しかしそれにはこちらも彼らの生活の中に入り込んで、普段何を見たり聞いたりしているかを知っていないと話が合わなくなる。

ORの原点はまず現場をふむことだ。この教育は間違っていなかったらしい。卒業生の約半分がコンピュータ関係、あとがQCとか、営業にまわされているが、結構うまくやっている。1カ月おきに、新橋のバーに、何となく集まることを続けたが、実に面白い話を聞かしてくれた。

ところで、最近のORだが、会誌や大会に出ても、相変わらず数学のお化けのような報告が多いのは閉口する。それで一体役に立っているのだろうかという疑問である。

ところが一方、世の中にはORを必要とする事態が次々と起きている。大韓航空の事件は、世間の耳目を集めたが、これなどはORのテーマとして絶好である。無線交信のデータの謎、当初飛びあがったソ連機はどうやら接触に失敗している

が、なぜか。これでソ連側の探知能力の推定ができる。サハリンから飛び出したのがやっとなつかまえが、一度下に回り込んでから、少し下ってミサイルを打っている。その理由は？ 海に沈んだフライトレコーダの回収ゲームなど、まったくORのタネは尽きない。

もっと新しい話題のひとつは、ロッキード裁判がある。日常的な話題としては、サラ金やスーパーの強盗、近頃では銀行関係の強盗が減ったが、強盗のトータルを見ると、件数はあまり変わらない。強盗が、これまでの目標から、他へ移っていった遷移確率の話題などがある。金融強盗のORというとおだやかでないが、テーマとして時の話題として、ピッタリである。

高度成長のあと日本経済は低成長に入ったといわれる。そのためずいぶんいい加減な評論ができて、しかも信用する人が多い。高度成長の時代はみんなで一生涯懸命やらないと置いていかれたがどうせ低成長だからゆっくりやるか。

これはとんでもない誤りである。調べてみるとまったく横這いか下向きになってしまった企業もあれば、一方で高度成長しているものもある。これらをすべて加えたときに、たまたま3とか4%になっただけなのである。またモノ離れ説も同じである。これは買いたいモノが減ったというだけで買いたいものが出てくれば、いくらでも売れる。VTRやパソコンを見ればよい。

いまの不況対策として、内需振興のために減税をやれという説がある。ところがそれで本当に金が回り始めるかどうか怪しい。それよりも買いたいモノに重点的に施策をしたほうがよい。VTRの物品税をゼロにでもすれば、爆発的に売れだして、その波及効果は大きいはずだ。ところが、財政当局にはそのような度胸はない。企業の設備投資への減税でさえ、しぶっているくらいだからだ。

先日テレビを見ていたら、北海道の国鉄線廃止

の第1号ということで、白糠線が出た。何と10輛編成の列車が満員である。これは、話題さえあればそちらに金を払いたい人がまだずいぶん居るということを示している。このような潜在需要の掘り起こしで成功したのが、ディスカバー・ジャパンだった。これはディスカバー・アメリカの物真似だったが、本家よりもむしろ有名になった。ところがこれがいつの間にか消えている。

このように、ちょっと話題をひろってみただけでも、OR屋の扱うのにちょうどピッタリのテーマがいくらでもある。この場合、定式化がむつかしい、といったことを考える人がいるとしたら、ORについては半可通だといってよい。どうやるかわからないテーマこそOR屋がとりつくべきなのである。既成の式や方法で解けるものは、その道の専門分野として確立して、どんどんやっている。

以前にある会合で出た意見があった。当初ORでとりあげて標準化した方法、たとえばLPも在庫モデルも、また行列にしても、それぞれの専門分野の中にとりこまれた。そのためよい論文はそちらのほうでどんどんでている。こうなるとORは先細りになるのではないかというのである。

たしかに、信頼性工学、在庫管理、日程計画などなど、そちらの専門誌に論文が出るようになった。しかしこれでよいのである。ORとは、もともとそういうものである。パターン化してしまったり、面白くも何ともない。まったくの未知の新しいテーマこそOR屋の仕事なのである。BellmanのDPにしても、当初出たとき、あまり使い途がないのではないかとわれていたが、コンピュータの普及もあって簡単に計算できるとなると、あらゆるところに使われるようになった。

だからこれからのORは、これまでと同様に、問題があったら何でもびつくといい、ダボハゼ精神からスタートするのが一番よいと思う。